

シンポジウム

当日は
4言語の通訳
コーナーを用意
しています。

英語・中国語・
ポルトガル語・
スペイン語
要事前申込

医療現場での 外国語コミュニケーション支援に向けて

愛知県立大学 × あいち医療通訳システム推進協議会 共催

日時 平成29年12月17日(日) 13:00~16:15

会場 名古屋国際センター別棟ホール 定員 150名 | 参加無料 |

医療通訳の重要性やニーズが年々高まっています。愛知県では「あいち医療通訳システム(AiMIS)」がスタートしてから5年がたち、病院等における年間利用実績は1800件を超えています。外国人の方が安心して医療を受けられる環境を整備することを目指して、このたび関係者や一般市民の方々が一堂に会する公開シンポジウムを開催します。ぜひご参加ください。

シンポジウムの前に、医療通訳者、コミュニケーション支援者、医療通訳に関心のある方などを対象とする交流セッションを右記の通り開催します。該当する方はぜひご出席ください(要事前申込)。

時間 11時50分~12時30分

場所 名古屋国際センター別棟ホール控室

基調講演 13:05~13:55

「日本の医療通訳のゆくえ ~医療通訳の現状と課題~

重野 亜久里 多文化共生センターさよと 代表理事

京都市医療通訳派遣事業を担当。医療通訳者の養成派遣の経験やノウハウを活かして、全国各地の医療通訳研修などで講師として活躍。2014年には厚生労働省「医療機関における外国人患者受入れ環境整備事業」にて「医療通訳育成カリキュラム基準」「医療通訳テキスト」の執筆、作成を担当。現在は、日本医療教育財団の「医療通訳技能認定試験」に関わる。

パネルディスカッション 14:20~16:15

■ パネラー

浅野 輝子 名古屋外国語大学現代国際学部 教授

カサノバ エクトル 産婦人科医師

葛 冬梅 中国語医療通訳者、東海外国人生活サポートセンター

黒田 薫子 スペイン語医療通訳者

小松 麻利奈 豊橋市民病院医療通訳者

コーディネーター / 糸魚川 美樹 愛知県立大学外国語学部 准教授

あいち医療通訳システム推進協議会とは

「あいち医療通訳システム」を運営するため下記の団体が共同で設立した協議会です。愛知県、県内全市町村、愛知県医師会、愛知県病院協会、愛知県歯科医師会、愛知県薬剤師会、愛知県看護協会、愛知県立大学、愛知大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学

交通アクセス ※会場へは公共交通機関をご利用ください。

- 名古屋駅(JR、名鉄、近鉄、名古屋市営地下鉄)から徒歩7分
- 名古屋市営地下鉄桜通線「国際センター」駅下車すぐ
(名古屋国際センタービルと地下でつながっています)
- 名古屋バス「国際センター」下車すぐ
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号

問合せ・シンポジウム参加申込先

愛知県立大学 学務課

〒480-1198 愛知県長久手市茨ケ廻間1522番地3

TEL 0561-76-8832 (直通)

※土日・祝日を除く午前9時から午後4時まで

参加希望の方は

所属、氏名、連絡先と通訳を利用される方は利用言語、交流セッションに参加される方はその旨を記載の上、E-mail又はFAXで愛知県立大学 学務課までお申し込みください。

E-mail com-medico@bur.aichi-pu.ac.jp

FAX 0561-64-1105

愛知県立大学/ あいち医療通訳システム推進協議会共催 シンポジウム「医療現場での外国語コミュニケーション支援に向けて」

多文化共生研究所 副所長 小池康弘

日本語でのコミュニケーションが困難な外国人患者が受診する際、医療通訳を派遣したり電話通訳を行なう「あいち医療通訳システム(AiMIS)」(事務局:愛知県多文化共生推進室)がスタートして5年が経過した。医療通訳のニーズは年々高まっており、同システムに登録する愛知県内の医療機関はおよそ120、年間利用実績は平成29年度には2000件に迫る勢いとなっている。全国的にも医療通訳の重要性やニーズが高まる中、医療通訳の活動状況や意義については一般市民や医療関係者の間でも十分に理解されているとは言えない。そこで、外国人が安心して暮らせる地域環境を整えることにつなげるため、本学(多文化共生研究所、医療分野ポルトガル語スペイン語講座実行委員会、地域連携センター)と、あいち医療通訳システム推進協議会の共催により、関係者と一般市民が一同に会するシンポジウムを開催した。

シンポジウムは平成29年12月17日(日)13時～16時半に名古屋国際センター別棟ホールで開催され、県内のみならず全国各地から約200名を超える参加者があった(中途参加者等も含む)。その構成は、医療機関関係者、医療通訳者、行政関係者、大学教員、学生、外国人住民、一般市民等、多岐に及ぶ。また、シンポジウム開始前に事前申し込みによるプレ・イベントとして「医療通訳者・コミュニケーション支援者の交流セッション」を行い、医療通訳に関わっている人たちを中心に40名以上の参加者があった。

高島忠義学長による冒頭挨拶に続いて、重野亜久里氏(多文化共生センターきょうと代表理事)が基調講演「日本の医療通訳のゆくえ～医療通訳の現状と課題～」を行い、京都をはじめ、全国各地の医療通訳派遣制度の事例、質的担保や通訳者認証制度をめぐる議論などが紹介された。講演後、「あいち医療通訳システム」の概要について、愛知県多文化共生推進室室長補佐の大橋充人氏から説明がなされた。

後半のパネルディスカッションは糸魚川美樹(本学准教授)がコーディネーターとなり、以下の5名のパネリストがそれぞれの立場から現状報告と提言などを行なった。葛冬梅氏(中国語医療通訳者、東海外国人生活サポートセンター)は外国人住民の立場から現状と提言を、エクトル・カサノバ氏(医師)は日本で活動する外国人医師として考える医療通訳の重要性を、黒田薫子氏(スペイン語医療通訳者)は派遣型医療通訳の現状と課題について、小松麻利奈氏(豊橋市民病院ポルトガル語医療通訳者)は地域社会と医療通訳の重要性について、浅野輝子氏(名古屋外国語大学教授)は医療通訳者の養成という観点から、それぞれ発言を行ない、最後にフロアと質疑応答が行なわれた。



最後に、愛知県多文化共生推進室長の木佐貫昭二氏より閉会の挨拶があり、愛知県における医療通訳システムの立上げ時の苦労やエピソードが紹介され、また本シンポジウムを通じてあらためて医療通訳の重要性が広く共有され、心強く感じた旨の言葉があった。